

DRAMA かながわ 別冊 1号

神奈川県演劇連盟事務局・横浜市中区福富町西通り52(横浜演劇研究所内) Tel.045-261-4866

DRAMAかながわに“僕らの演劇”という劇評を載せるページがあります。神奈川県演劇連盟加盟劇団をお互いに鑑賞し親睦を深めるとともに、より良い芝居創りに活かす目的で評価しています。今回、DRAMAかながわ別冊として九月から十二月までの作品を一冊にまとめることにしました。秋から冬にかけて各劇団は一年の集大成として数多くの作品を舞台で行っています。連盟加盟劇団の舞台をDRAMAかながわで振り返っていただきたいと思います。

もじゃもじゃ頭とへらへら眼鏡

「もじゃもじゃ頭とへらへら眼鏡」

作・演出：笹浦暢大 ほか

9月17日～18日 於：県立青少年センター多目的プラザ

眼鏡チーム「いすよ」。明次の愛した相手は、ごく普通の椅子(名は「いすよ」)だった。それを相談された小暮、小暮に呼ばれた元カノのえい子は当然混乱する。一種の不条理だが、真剣な明次と、呆れる小暮たちのやりとりで笑わせられる。そして、いすよをいとおしそうに愛撫するラブシーンには、ちょっとドキドキしてしまう。そんなバカな、と思



っていたのに、だんだん明次のいすよへの愛が見えてくるのだ。そして、いすよは妊娠、出産するが、生まれた母似の椅子を見て、明次は自分の子どもではないのでは、と疑う。その気持ちを振り払い、明次は、椅子と結婚できる外国のナントカ村に、いすよと子どもと旅立つ。小暮は、自分はあるに誰かを愛したことがないと思う。私もなんだか、いすよがうらやましくなった。途中のダンスは必要だったか？

もじゃもじゃ頭「海に老いる」。しばらく観て、タイトルの意味がわかった。結婚相手の父親が海老の養殖業をやっているの、将来は継がなくてはいけないのに海老嫌い、という男(ヒデ)が、それを克服するために友達(行雄)に協力を頼む。一人暮らしの部屋に行雄が来て、酒を飲みながら馬鹿馬鹿しいやりとりをしている。でも、男同士って、こんな感じなのかも、と思える。結局、この時間の中では克服できなかったが、行雄の協力のもと、克服の覚悟を見せて終わる。そこには、馬鹿馬鹿しくも熱い男の友情が見える。海老好きの私としては、ぜひヒデに頑張ってもらいたいと思う。

劇団ソコソコ「チュウニ」。中2のリサコが、ケンイチ、タツヤ、ジュンペイと、オズの魔法使いの稽古をしている。側には本を読むルイ。稽古風景は同じことが繰り返され、ちょっと寝不足の私は眠気に襲われ、まさか役者が間違え

て同じシーンを繰り返してるのではなかろうね、と思う。もちろん間違えているのではなく、リサコ自身も途中で繰り返していることに気づく。そこからストーリーは大きく動く。単なる中学生の余興の稽古ではなく、死に行くリサコの願望の世界だったようだ。実は大変申し訳ないが、一度襲ってきた眠気が払拭できず、所々あやふやである。でも、最後には旅立つリサコと、リサコの力によってあらためて出会うケンイチたちの姿に爽やかな気持ちになった。

特にテーマなどに関連のない3本だったが、終演後、素直に「面白かった」と思った。bチームもぜひ観たかったと思う。

劇団麦の会：岡本みゆき

横須賀市民劇場プロジェクト

「我が師・我が街」 作：別役実 演出：羽賀義博

10月8日 於：横須賀市文化会館大ホール

別 役作品の深い理念は私にはなかなか理解できないが人間の存在から始まる日常そして尊厳へとつなげるこの戯曲は、ソートン・ワイルダーの名作「わが町」への別役氏的な賛美として書かれたものであろうと私なりに解釈して観た。しかし後に残った思いは、どうにも動かし難いソートン・ワイルダーの「わが町」の素晴らしさであった。



何故横須賀市民劇場プロジェクトが、別役作品を多く取り上げるのか？あくまで私的な邪推であるが…、それは戯曲のテーマさえ全員の共通認識になっていれば、独白の様な台詞で構成されている戯曲は、役者間で創り上げなければならぬ相乗効果が少々薄れていても成立するからではなかろうか(とのよもやの誤解は無いと思うが)？しかしそれは、観客を置き去りにしかねない危険性を孕んでいると思う。やはり演劇は創り手と観客が一体となって完成し得るものではないだろうか(自戒を込めて?)。

勢いがあるって頑張っている横須賀市民劇場プロジェクトの別役作品以外の芝居も観てみたい。期待大である。

劇団よこはま壱座：勝碇若子

横浜小劇場

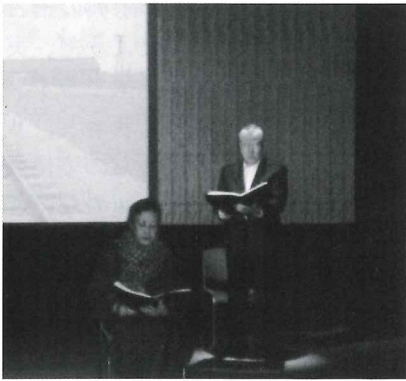
朗読劇「あの日、あの雨」

作:別役実 演出:飯田克衛

10月15日～16日 於:県立青少年センター多目的プラザ

その日は日差しが強く、紅葉坂を登って会場に付く頃には汗ばむくらい。自分は朗読劇なるものの観劇は初めてなので楽しみにして向かいました。いざ多目的プラザに入りますと舞台は赤い照明にほんのり染まり、身の引き締まるような雰囲気が出ておりました。椅子の配置、照明の当て方、映写されている写真など視覚的にもいろいろ工夫されておりました。特に椅子の配置に関しては登場人物の構成を理解するのに役立ちました。

衝撃的だったのは、チェルノブイリ原発事故によりモスクワまで放射性物質が風によって拡散することを恐れて、チェルノブイリ周辺地域に人工的に雨を降らせたという事でした。そしてその被害をうけた少女の存在を、日本の女性ピアニストが知ることになりますが、実はピアニストの母も広島で被爆していた被爆二世だったわけです。



広島、長崎に落とされた核爆弾。チェルノブイリ、そして福島原発事故。これらによって被爆した人々の気持ちがどれほどのものだったのか、想像を超えるものがありますが、現実について降りかかるかも判らない不安や恐怖の環境の中に自分もいるのです。

静かな語りから、こんな事は絶対にあってはならないという思いが伝わってきた舞台でした。

京浜協同劇団:斉藤成郎

劇団麦の会

「第6回☆麦畑☆秋の大収穫祭」

作・演出:劇団麦の会

10月22日～23日 於:県立青少年センター多目的プラザ

第六回☆麦畑☆秋の大収穫祭～駅～、10月22日19:00の回を拝見。土曜日の3回目ではあったが、エネルギーに満ちたお芝居であった。

お芝居は9つの短編のオムニバス方式。「片道約110分」と書かれたパンフレットにはそれぞれのお話が線路で結ばれている。表紙の電車の絵といい、コメントといい、「駅」にまつわるお話が満載で、なかなか趣向が凝っている。

一方で「日常」を描いたドラマには不安もあった。駅や通学・通勤時に出会った「面白い話・面白い人」は誰もみな持っている。その記憶に挑むお話を描くのは度胸がいるものである。

実際、第一話の「実況中継～始発編～」は今ひとつ乗り

切れなかった。実況中継のリズムが作り出せていないし、「もっと面白い人知っている」感がどうしても拭えなかった。

オムニバス形式の物語が進行する

につれ、線路で続けるような、全体的な演出に欠けていた点も気になった。が、最後の落としどころはしっかりと出来ていた。

まずは「クラゲ心中」。ベタな笑いとはタバタ劇は、当初辛すぎる感があったが、無理を押し通すその力、思わず役者自身が失笑した。あれは演技だったのか、本物だったのか。演技だとしたら相当なものである。こちらまで、一緒に失笑し、そして力がどっと抜けた。抜けてみると、あとは気楽に笑って観られた。

最後はがらりと変わってまったり「煙た～い奴ら」。哀愁漂う新幹線達の話は、脚本もよく出来ているし、演技も自然。オーバーサイズな小道具も雰囲気もしっかり貢献し、安心して観られるお話だった。

途中、物足りなさを感じながらの観劇だったが、終わってみると意外にも、程よい疲れと清々しさが残っていた。思うに、役者の頑張る姿によるものではないか。余裕はないけれど、肩の力は抜けている、程よい力の入り方が出来ていたのではないかと思う。決して「上手い芝居」ではないけれど、「挑戦する姿勢」に、気持のよい反応ができたのではないだろうか。今後もこうした「挑戦」する姿を見守りたい、そんな気持ちにさせる公演であった。

横須賀市民劇場プロジェクト:神田聖美

劇団こゆるぎ座

「元禄棟割長屋」 脚色:五塔倫太郎 演出:楠田正宏

10月29日～30日 於:小田原市民会館大ホール

小田原で演劇活動を行っている者にとって劇団こゆるぎ座はとても大きな存在である。常に、会場である小田原市民会館には長い入場の列が出来てい



る光景を目の当たりにしてきた。お客が毎年の公演を心待ちにしていることが伝わってくる。小田原の町に根付いていることがとても誇らしく、また嬉しく思っています。今回の公演は古典落語を演劇にしたものとのことで落語を好む者として大いに期待をして観劇した。舞台には長屋のセットが、でんと構えている。時は元禄、江戸の下町長

屋。長屋に住むさまざまな人物が絡み合いながら芝浜等の落語を元にした話に繋がっていく。時代劇を長年演じてきている役者達の落ち着いた芝居は見ていて心地いい。落語にもさまざまな登場人物が出てくると同様にどこか抜けている長屋の住人の数々。滑稽な会話を真剣に演じることが笑いに繋がることを改めて感じる事ができた。ただ、落語を元にしていて思ったのが、“さげ”は変更しないほうがいいのではないだろうか。芝浜のくだりで最後に二人がお酒を一緒に飲むというのはどうしても違和感を覚えてしまう。これが全くの創作なら先入観なく観られるのではないかと考えてしまった。とはいえ、落語最員の偏見とも言えなくないが。

二時間を越える芝居は長屋を舞台にしながら様々な場面を展開し、場が終わるたびに巻き起こる拍手はまさに一体感の演劇を表している。お客はその場面ごとに一喜一憂し、拍手を送る。そして、役者はまたそれに応える。なにより、こんなことを書いたら失礼かもしれないがこゆるぎ座のベテラン役者はとても若い。普段お会いしている時と舞台での生き生きとした姿はまさに別人を感じさせてくれる。役者は舞台で若返るのだなとしみじみ思っていました。

今回、八月のシャハラザードに参加した役者が二人、こゆるぎ座に客演として参加していました。こういった結びつきが演劇の輪を広げていってくれると信じています。最後の大団円でのフィナーレ。終演後のロビーでは「また、来年ね」という声を聞きました。これが町に根付いた劇団の形だと思いながらお酒を飲みに行きました。

演劇プロデュース『螺旋階段』：緑慎一郎

G/9-Project

「踏切のモスキート音」 作・演出 仲尾玲二

11月10日～13日 於：県立青少年センター多目的プラザ

1986年。昭和が終わりを迎えるカウントダウンが始まった頃、日本人は何かを取憑かれたかのように浮かれていた。それが空砲のバブルだとも気づかぬまま…。そのほんのわずか先の未来に大きな落とし穴があることを予感を例えた「音」。

主人公の一平に、ある日警告音が聞こえてきた踏切の音。それは一平の耳にしか届かない警告音。一平はなぜその音が聞こえるのか？その音は何を意味してるのか？音の正体を探し求める。ある日一平の前に突如現れた謎の男はかつて同じように警告音を聞いたことがあるという。聞こえるのは自分だけじゃなかったという安堵の反面、では自分はどうすべきなのか。一平のもとに同じように警告音が聞こえる仲間が集う。彼らはひたすら模索する。「何かを救わなければ」と。聞こえる人にしか聞こえない耳の奥にツーンと痛いあの聴力検査の音「モスキート音」。

劇団GARAKUT



Aと9月製作所という2つの劇団が一つになって結成されたG/9-Projectが渾身の力で投げたオリジナル作品「踏切のモスキート音」。小さな小屋でシンプルなセットにも関わらず観る者に場面を想像させてくれたのはやはり芝居力と演出力だったのではないだろうか。多少の演技力にばらつきは無きにしも非ずではあったけれど…幕開けから一気に90分間を駆け抜けていったモスキート音。観る者に「あなたにも聞こえますか？それはどんな音ですか？それは何を意味する音ですか？」答えはそれぞれの胸の中にしかないという結論は最後まで見る側にゆだねられた芝居だった。明確な結論を観たい観客には「だからなんだっただ」というモヤっとしたものだったかも…。

劇団員よりも多い客演陣にはいささか苦笑いではあるけれど、実際芝居に違和感もなく非常に息が合っていたのではないだろうか。これだけの力があるのだから「例えば…」という説明をすることなく観客に伝えることも出来たんじゃないかと更にハードルを上げたい気もする。得も言われぬ胸騒ぎとでも言えればいいのか…そんなモスキート音。「正義という言葉が死語にならない時代であって欲しい」そんな思いを胸に会場を後にした。

劇団こゆるぎ座：保乃しんり

劇団川崎演劇塾

「ホントに？」 作：西田シャトナー 演出：五味夏子

11月11日～13日 於：相鉄本多劇場

五味夏子さん演出の

舞台は、五味さんも四人の登場人物の一人として登場し、四人の女性たちは熱く語り、動いた。熱演したのは役者ばかりでなく、黒子(但し衣裳は派手)として劇中で舞台設定に飛び跳ねた小川がこうさん、つなおさん、足立涼子さん、村田好行さんも、合間合間に忙しくテキパキと登場した。芝居は年末ジャンボ宝くじを買って、賞金の使い道を妄想するというもので、結局当たらない結末がどう観客に迫るのだが、現実と妄想が絡み合っただけの芝居進行が今ひとつ観客に迫りきれずにしまったのが残念。多分本(戯曲)の所為だろうと思った。

この芝居の劇評を仰せつかったのに、初めてお目にかかる作者については何の知識もなかった(演劇資料室に2冊、西田氏の戯曲があったのに)。演劇とはどの様なかわりをお持ちの方なのか知りたくてパソコンのお世話になった。それによると、自称劇作家、演出家、俳優、映画監督だとのこと。1989年に劇団「惑星ピスタチオ」を結成し、2000年に解散。同年1年限りの劇団「LOVE THE WORLD」を結成。2002年には「西田シャトナー演劇研究所」を立ち上げ、更に映画製作など演劇以外の活動も行っている。「ホントに？」は、”牝豹プ



ロデュース#3”として中野MONOで2005年10月に、大阪で12月に上演した。今年11月27日のブログには「山梨の高校演劇大会の審査員として参加したが、アドバイスじみた事を彼等に伝えたくなくなったが、それは間違いで、本当は自分が問われているのであり、高校生達からどれだけ豊かな美しい事を受け取るか、一般観客なら見逃すかもしれない未来の可能性を見逃さない、それが問われるのだ。」とあった。高校演劇にひとしおの思いを持つ私としては、西田シャトナーという演劇人に一種の安心感を抱いた。

横浜演劇研究所：飯田克衛

演劇プロデュース『螺旋階段』

「言葉は宙に舞う、僕はそれを見ていた」 作・演出:GREEN
A:11月12日、13日 B:12月3日、4日
於:A小田原生涯学習センターけやき Bラゾーナ川崎プラザソル

題名だけを見ると考えこんでしまうタイトルだが、客電アウトしはじめた瞬間その思考は脳裏から消された。というのは決して音響がおもいのほか大きくてけしたのではない。フリーライターの柏木優は自分が思うような仕事に会えず下世話やでっちあげ風俗などの情報を記事にすることしかできなかった。そこへ元上司小松が登場し社会派の記事をかいてみないかと持ちかける。柏木は仲間と協力し東島の不正疑惑を暴いていく。コメディ調で楽しく観させていただきました。柏木をとりまく様々な個性豊かなキャラクターが登場する。あ、登場といえば皆さんドーン！っていいながら柏木の前に現れるというのが決まりの合い言葉。理由は特になく電話のもしもしみたいな感じ。でもだんだん言わなくなってしまっていたのが残念…。最後まで欠かさず言い切ってほしかった。小松さんドーンの時かなりきまっています。あと私的に好きなキャラはゲイバーのゆきさん。



いい具合に声が若干酒やけのままっぽかったのにはツボにはまりました。あと気になったことが若島津の服が螺旋階段のTシャツだった。あれは衣装なのだろうか…。うむ。宣伝？

柏木が東島の不正疑惑の記事を書いたのにずっと追っていた大物政治家の記事を小松は出さなかった。それは柏木がクビになってしまうから。そのとき私は金で左右される真実と偽りの世界を憎んだ。偉いから全てが許されるとは限らない。ダメなことはだめとしっかり主張しクビなんかどーでもいいとまで言った柏木はカッコいいと思った。言葉を活字に変えて働く仕事は嘘も真実をも作り上げてしまうそんな職業を怖いとも思った。そんなことを考えさせられたが重くなくすっきりと爽快な気分だったのはコメディでユーモアな作品に仕上げられたからであるのだろう。

劇団葡萄座：増田晃子

劇団蒼い群

「なんとかせい!幕開いちゃってるんだから。」

作・演出:別府寛隆 11月12日、13日 於:横須賀市立青少年会館

劇 団蒼い群創立40周年を記念して上演された今作品。始まった時、「これはマズイ。」と思った……悪い意味で。蒼い群4人の方々のほぼご本人そのものの役に内輪受けかと思ひ、すべるギャグ、個性的な人物が多すぎて混沌とした舞台…。そこここに危険なニオイを感じさせるこの芝居が2時間30分持つのかと、残り時間を確認した。

ところが!なんのマジックか時間とともに、だんだんそれらが面白い具合にかみ合ってくる。完全にご本人がモデルの方々は、

「〇〇さん頑張れ!」とか「それ分かる!」

とか、ついつい感情移入してしまう。すべるギャグは、登場人物達が本気で一生懸命やることにより生まれる可笑しさを、逆に引き立て、彼自身もその本気で一生懸命の一部でもある。個性的でバラバラな人々が、芝居が破綻してしまうのではないかと心配になってしまいくらい突っ走り始めるところを、演出家・梶山役の小山さんが絶妙に制御する。始まった時にいきなり引いてしまっただけに、いつの間にか引き込まれて笑ってしまっているのを、こそばゆく思いながらの観劇となった。

しかし、40周年の厚みは、ここで、ただの喜劇で終わらせない。充分場を温めたところで場面は一転し、チェーホフの「ワーニャ伯父さん」の舞台とその舞台裏のふたつを、舞台を上下に分けることによって同時に見せるといふ、観客の心を否応なくすぐるもの変わる。舞台の表側は、数年前蒼い群が上演した演目が元になっているらしい。白一色に統一された衣裳により、視覚的にも雰囲気的にも落ち着いた芝居が淡々と進む。舞台の裏側は、打って変って感覚的にはドタバタの極彩色。同感したりハラハラしたり、同じく演劇に携わる者は、より一層入り込んで見てしまうだろう。観終わった後は、自らも一芝居終えたような気分になってしまったくらいだ。

メインもデザートもおまけもついている「お子様ランチ」のような、盛りだくさんの今回の芝居だった。

劇団河童座：浅葉久美子

風雲かぼちゃの馬車

「チェスト寺田屋」 作:重信臣聡 演出:土井宏晃

11月18日~20日 於:下北沢・東演パラータ

咲 いた桜に何故駒とめる、駒が勇めば花が散る」寺田屋事件のことを聞いた坂本竜馬が歌ったとされる。京都伏見の船宿・寺田屋で薩摩藩士同士の討ち合いとなつ



た事件。押さえ込んだ相手を自分もろとも突き刺して仕留めろと言う者、そしてそれを実行する者。同じ薩摩で育った若者同士が、一方は倒幕という理想に

燃え、一方は藩命という義に従い、相討ち合い、若い命を散らしていった悲しい事件。私も幕末の歴史が大好きなので、楽しみにして観劇に行った。会場は下北沢の東演パラータ。ここでいくつか芝居を観たことはあるが、県演連所属の劇団のお芝居は初めてである。舞台装置はシンプルであるが、上手く使っているなど感じた。階段を駆け上がったたり、転げ落ちたりと、風雲かぼちやの馬車さんらしく、躍動感があって熱いお芝居だった。風雲かぼちやの馬車さんにとって旗揚げ公演の再演とのこと。薩摩の郷中のことからストーリーに盛り込まれているのはすごいなと思った。「幸福の黄色いハンカチ」と「蒲田行進曲」のパロディーも少し入っているかなと思わせるところもあったが、それも面白い。前説から楽しく作り上げられていて、何より若い俳優が多いのは羨ましいなと思った（うちの劇団は俳優が特に少ないので…）。平場に大勢で殺陣をやっている場面はこの舞台では狭いかなと感じたが、あの限られた空間で事故や怪我も無く上手く殺陣をやっているのはさすがに良く作りこんでおられるのだなと思った。スピード感があってとても楽しいお芝居でした。ただ一つだけ、少し残念かなと思ったのは、奈良原喜八郎の感動的なセリフのところでの音楽の選曲がちょっと合っていないのではないかなど。もう少し涙腺を刺激してくれそうな音楽であればきっと泣けただろうにと思ったのだが、まあ、オッサン（私）と若い人とのセンスの違いのせいなのかもしれないので、この辺で。公演お疲れ様でした。

劇団川崎演劇塾：村田好行

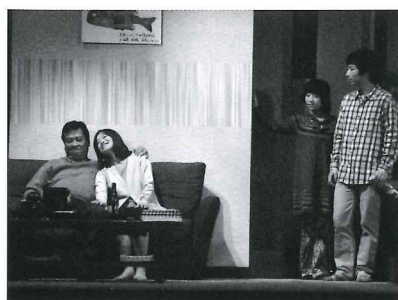
劇団かに座

「母さんからの贈り物」 作：原武彦 演出：田辺晴通

11月18日～19日 於：関内ホール小ホール

11月19日（土）2時の部を観させていただきました。

物語のあらすじについて申し上げていると字数が不足しますので、できるだけ省略させていただきます。母さんが突然家を出て大阪で仕事をしたいと言い出された家族は、母さんの思惑どおり波風の中におうおう立ちまわされてしま



う。夫、長男、長女は自分の生き方を見直すようになって行く。その波風は今まで「いさかいのない家庭を作ること、家族が寂しい思いをしないようにすること」と母さんが頑張ってきたことに、

母さん自身がこれでいいのかと大きな疑問にぶつかり生まれたものであった。その波風が母さんからの贈り物である。作品は家族の個々が家族について思っていることや、自分自身の生き方について真剣に考え見つけ直す機会が本当に少なくなっている時代であればこそ、大きな一石を投じた作品に仕上がっていたように思う。しかし、登場人物の一人一人にしっかりとスポットはあたっていたのだが、最後の方では登場人物の皆さんがものわりの良い人達のように感じられてしまった点が、ぜいたくを言わせてもらえれば少し残念な気がした。又、しかし、借金まみれのおばあちゃんの影響を受け入れてしまう家族と、反省のかけらもみられないおばあちゃんのあるりようには、なにかおかしさと同時に、許しあえる家族の心の豊かさを感じさせられた。「前向きに積極的に人生を生きようとする家族に乾杯したい。」という気持ちにさせる作品に仕上がっていたように感じられたことを結びに申し上げます、お疲れ様でした。

劇団蒼い群：村田次郎

劇団『横綱チュチュ』

「鳥が泣く、アラヤの空に」 作：菱倉あゆみ 演出：団のぼる

11月19日～20日 於：磯子区民文化センター 杉田劇場

冒頭から、客席の間を沢山の役者が交錯し、あらゆる鳥の名前を挙げては、その鳥が良い鳥か悪い鳥か？正解か不正解か？を断定していくという



印象的なオープニングから始まります。客席からの期待が高まっていくのが、目に見えるようでした。そんなオープニングの後、いよいよ本編開始です。鄙びた田舎町にある占い処“アラヤの館”には、駄洒落&発明好きなオーナー、常駐する靈感の強いオネエ系占い師など個性的な数人の占い師が常駐しています。そこでのナンバーワン占い師であるシングルマザー・娑耶加（さやか）は、新たにメンバーとしてやってきた凄腕占い師・董（すみれ）にナンバーワンの座を奪われてしまいます。ですが、陰のある雰囲気を持つ董には、どうやら事情がありそうで…？というのがこの物語の大筋です。しかし、お話はその二人の話に留まらず“アラヤの館”を訪れる客や、その占い師達の個々の悩みにもスポットを当てていき、その家族模様も織り込みながら、それぞれをクローズアップしていきます。よくある日常の中に、誰しものが何らかの悩みを抱えている。そして、そんな悩みの中に居る時は、誰かの温かい言葉が欲しくなる。“アラヤの館”に集まる人々のそれぞれの悩みと結論を、笑いも交えつつ、楽しく、また解りやすく描いた本作は、幅広いお客様の心に届いたのではないのでしょうか。

ちなみに、観劇後に調べたところ、このアラヤという言葉は「積もる、蓄積する、経験する」という意味の古いインド語（サンスクリット語）らしいです。人は皆、沢山の経

験を経て、迷いながら立ち止まりながら、だけでもそれを乗り越えてまた前に進んで…そんなことを繰り返しながら、人生を積み重ねていくのかもしれない。

劇中で董が言う「(人は)目的地が必要なよ。人は皆、迷いやすいから。」という台詞が、生演奏のBGMと共に、胸にしみました。

劇団河童座：浅葉久美子

劇団河童座

「河童」 原作：芥川龍之介 脚色・演出：横田和弘

A 12月3日、4日 B 12月10、11日

於：A横須賀市立青少年会館 B相鉄本多劇場

「河童」といえば芥川龍之介の代表作の一つ。河童の社会に迷い込んだ主人公が、人間と河童との常識のズレに最初は興味を抱きながらも徐々に辟易し、人間の社会に戻るも結局は人間社会にも馴染めなくなり気が触れてしまうという話。私も子供ながらに一種の危うさを感じながらこの作品を読んだ記憶がありますが、劇団河童座が上演するという話を聞き、あの淡々とした救いの無い話をどう舞台上で表現するのだろうと興味を湧きました。

劇場に入るとまず鉄骨の足場を組んだセットと当日パンフレットに載っていた出演者の多さに驚き、いよいよ開演。冒頭の精神病院の医師と主人公の男性の雰囲気は私が思っている原作のまま。しかし次のシーンからは原作を忘れ劇団河童座の世界へと引き込まれていきます。

まず、主人公が男女二名で構成され、台詞も現代的でテンポ良く話は進んでいきました。河童の皆さんも陽気で個性的な方々が多くとても魅力的でした。また原作には無いシーンもいくつか入っており、家族を作っていくシーンや



女子会をしているシーンなどに河童の中にも人間味(?)を感じ、中でも人間の女性が最後に河童の社会に残る事を選択するシーンは現代女性の自由な世相を反映している様で一番印象

に残っています。結局男性が一人、河童達とお別れをし、冒頭の重い空気を漂わせながら舞台は終演。

観劇を終えて、私は原作を再度読み直しました。そして舞台での出来事を思い出し、照らし合わせながら、改めてどちらもいい話だったなと思いました。ただ、敢えていうなら「河童2011」とでも言うべきでしょうか。また数

年後に見たい作品の一つになりました。

G/9-Project：亀山カオリ

劇団葡萄座

「親の顔が見たい」 作：畑澤聖悟 演出：山本伸二

12月10日、11日 於：泉区民文化センター テアトルフォンテ

葡

葡萄座が65周年の記念に選んだ本作は、イジメの加害者と思われる生徒達の親の視点で描いたドラマだ。学校内でのイジメの構図は、イジメの被害者の生徒がいて、加害者の



生徒がいて、その現場の近くにいる教師を入れた三角形が通常である。本作では今までその構図の外側にいた加害者の親に焦点を絞り、加害者の保護者にも考える事がもっと多くあるのではないかと問題提起している。その強いメッセージ性を劇団員と所縁ある客演が熱演していた。幕が上がると舞台はいたって普通の保護者会のような雰囲気が始まるが、少しずつ部屋の空気が重くなっていく。自殺をした生徒と自分の子供との関わりが徐々に具体性を帯び、親達の自己弁護と欺瞞が舞台上でよく跳ね、キャラクター達の言動、立ち居振る舞いに対してモヤモヤした気持ちが積み重なっていく。そんな劇進行の中、構図のさらに部外者である新聞配達店の店長が登場。第三者が一番事実を知っている事はよくある。その事実からもたらされた感情を伴い、ストレートに訴えかける姿が素直に胸に響いた。しかし、響き過ぎたのか、私の中ではここで劇が完結してしまった。タイトルとあらすじを読んだ時に特に興味をもったのは「親の顔が見たいのは誰か？」だった事もある。緊張が解放され、劇への興味を全て店長に持っていかれた後、遺族の母親の悲しみと怒りや、保護者達の葛藤と変化を拾い上げる事ができなくなった。最後に教師の話。先に書いた問題提起は、イジメについて教師が関われる事の限界表明にも受け取れた。そのような印象もあり、登場する教師達が無機質な人物に映った。これは2009年に葡萄座が公演した「遭難、」とは対照的だ。「遭難、」は本作と同じくイジメを題材に教師達の視点で描かれている。

「遭難、」の教師達、「親の顔が見たい」の教師達。葡萄座がこれまでに公演してきたドラマを点と捉えて、線を結びつけて考えるのも面白い。葡萄座が次に選ぶ戯曲を楽しみにしている。

劇団かに座：金野克行

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』● 京浜協同劇団● 劇団蒼い群● 劇団河童座● 劇団かに座● 劇団川崎演劇塾
- 劇団こゆるぎ座● 劇団葡萄座● 劇団麦の会● 劇団やぶさか● 劇団『横綱チュチュ』● 劇団よこはま壱座● 風雲かぼちゃの馬車
- まりこ☆みゅーじあむ● 横須賀市民劇場プロジェクト● 横浜小劇場● ラゾーナ川崎プラザソル● G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP：<http://kenenren.org/> 演劇資料室HP：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>

別冊DRAMAかながわ[第1号] 発行日：2012年3月1日 発行：神奈川県演劇連盟

編集：緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・浅水真子(劇団やぶさか)・海老名信吾(劇団よこはま壱座)・関口素実・山元洋一(外部協力)